

## オレンジ式コードパターン即興技法の概略

♠ 音楽療法における即興とは、①自由度を伴う対象者の音・音楽表現を治療者側が予測性を持ちつつ支える（治療者主導型即興：音楽枠設定即興）、もしくは、②予測できない対象者側の音・音楽表現に添う（主導者明確型即興：音楽枠非設定即興）、という営みで、そして、これらいずれのプロセスにおける音・音楽的主導権も、最終/結果的には治療者が緩やかに請け負い、その場面を治療（問題解決）的に導くもの、その意味では、本法は①に近いと考えています。（障がい児童等との音楽療法については、むしろ②に近いと考えます）

**抄録：**本稿では、筆者が作成した『オレンジ式コードパターン即興技法』を紹介するとともに、同技法を手がかりとしてコード機能が果たす音楽療法的即興における役割について述べた。本法は、ポピュラー音楽などの分かりやすい音楽構造を基盤としたコード音楽を治療者がピアノやギターで伴奏し、対象者はそれに合わせてキーボードや木琴、鉄琴などで即興演奏することで成立する技法であり、芸術療法における「枠付け法」の一種と位置付けられる。各コードパターンはいずれも対象者の音楽技能を過度に求めずに音楽的成立がなされるよう工夫した。当院（精神科病院）では約4年間にわたり個人および集団音楽療法において本法を試み、その間パターンを30種作成した。そして、それらを①ダイアトニックコード、②非ダイアトニックコード（モードモーション）、③Beatlesコード、④ブルース、ジャズ、ボサノバ、⑤響き（Hibiki - Pentatonic & Zebra）コード、と音楽的に分類した。①は、一定の調性に基づいたコード設定で、対象者にも分かりやすく本法導入に適している。②は、教会旋法からヒントを得ており、一時的な転調感や音階の歪みによる独特な雰囲気を提供しやすい。③は、The Beatlesが使用したモードとブルース的要素を含んだもの。④は、音楽のスタイルによったもの。⑤は、ペンタトニック的音使いや不協和音を意図的に組み入れ、通常のコード機能を弱めることを目的とした筆者の創作コードである。

本法はハーモニー認知が可能な前思春期以降の心理的課題を抱えた対象者を適応とし、治療場面では各パターンをその疾患特性と治療目標に応じて使い分ける。治療意義として、対人関係に困難さを持つ対象者に、負担なくまた創造性をもって他者と繋がる感覚をもたらす要素が挙げられる。

一般的に音楽には始点と終点が存在している。そして調性音楽においてコード機能は音楽の推進力を担い、基本的にはI（トニック）という音楽的重心を持ちつつ、途中さまざまなコードによる音楽的振幅を経過しながらも、最終的にはV（ドミナント）から再びIへ戻って終わる（V → I ; ドミナントモーション）。人間は終わりを意識するがゆえ自己以外のさまざまな事象との関係性を実感できる存在であり、コード音楽を用いた即興演奏過程はそれらの追体験となり得る可能性が考慮される。

**技法の概略：**本法は、治療者が提供するコード音楽の枠の中で対象者自身が即興するというコンセプトのもと、1980年代前半にはすでに文化的成熟を遂げたといえるポピュラー音楽などの分かりやすい音楽構造を基盤とし、音楽枠が制限された実用的即興技法と位置付けられる。具体的には治療者が音楽的予測性を持つコードパターン（例：Fmaj7 → Em7 → Dm7 → C、のボサノバリズム）をピアノやギターで提示し、パターンを一巡させた後、「どうぞ」と対象者に呼びかけ、合図を送る。対象者はそれを聴き、キーボードや木琴、鉄琴（取り外し可能なものが便利）で即興演奏（音合わせ）を開始する。

仮に調をC（ハ長）調もしくはAm（イ短）調で設定した場合、多くはそれに伴うダイアトニックコード（その調の構成音からなる和音：幹音-ピアノ白鍵盤～ただし短調の場合は和声的短音階として#ソも含む）でパターンを作れば、対象者は幹音のみを選択することで音楽はほぼ成立する。ただし、パターンは状況に応じ多数用意し、非ダイアトニックコード（以下下線部D7）を含む（例：Am → D7 → F → C → Am → D7 → F → Am、の3拍子、ドリア旋法的展開）提示などの工夫も取り入れる。進行過程に展開部（Aメロに対するBメロ）を設け、音楽場面の变化や継続感、終止感などを演出する。本法は、失敗なく創造的に対象者と音楽空間を共有でき、個人および集団セッション場面で活用している。